

永遠の生命の架け橋

丸山 勉

[聖書] ルカによる福音書 16章 19～31 節

「ある金持ちがいた。いつも紫の衣や柔らかい麻布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた。この金持ちの門前に、ラザロというできものだらけの貧しい人が横たわり、その食卓から落ちる物で腹を満たしたいものだと思っていた。犬もやって来ては、そのできものをなめた。やがて、この貧しい人は死んで、天使たちによって宴席にいるアブラハムのすぐそばに連れて行かれた。金持ちも死んで葬られた。そして、金持ちは陰府でさいなまれながら目を上げると、宴席でアブラハムとそのすぐそばにいるラザロとが、はるかかなたに見えた。そこで、大声で言った。『父アブラハムよ、わたしを憐れんでください。ラザロをよこして、指先を水に浸し、わたしの舌を冷やさせてください。わたしはこの炎の中でもだえ苦しんでいます。』しかし、アブラハムは言った。『子よ、思い出してみるがよい。お前は生きていた間に良いものをもらっていたが、ラザロは反対に悪いものをもらっていた。今は、ここで彼は慰められ、お前はもだえ苦しむのだ。そればかりか、わたしたちとお前たちの間には大きな淵があつて、ここからお前たちの方へ渡ろうとしてもできないし、そこからわたしたちの方に越えて来ることもしかない。』金持ちは言った。『父よ、ではお願いします。わたしの父親の家にラザロを遣わしてください。わたしには兄弟が五人います。あの者たちまで、こんな苦しい場所に来ることのないように、よく言い聞かせてください。』しかし、アブラハムは言った。『お前の兄弟たちにはモーセと預言者がいる。彼らに耳を傾けるがよい。』金持ちは言った。『いいえ、父アブラハムよ、もし、死んだ者の中からだれかが兄弟のところに行ってやれば、悔い改めるでしょう。』アブラハムは言った。『もし、モーセと預言者に耳を傾けないのなら、たとえ死者の中から生き返る者があつても、その言うことを聞き入れはしないだろう。』」

[序] 言葉の空しさが言われる時代に

私たちはいつの間にか「言葉」の真実さというものを失いつつあるのではないか、と思う時があります。「言葉」は、その人の内面を表すものと思いたいですが、果たしてどうでしょうか？ 私たちもいつしか政治家のようになって（良い政治家も勿論いると思いますが）自分の都合に合わせて言葉を操ってしまうとすることがあるのではないかと思います。つまり、表面上取り交わす言葉には裏があつて、それを見抜けるか見抜けないかが問題だ、と私たち自身もどこかで思っていることはないでしょうか。「嘘も方便」という言葉もありますね。

しかし、今日の聖書のテキスト（ルカ福音書 16 章）の最後の方では、「モーセと預言者」の言葉をあなた方は真剣に受け止めることこそが大事だと、言っています。言ってみれば、神様の言葉は弄ばれるものではない、そこには裏も表もない、神様

のご意志そのものであって、それを人間は耳を傾ける必要があるのだ、そのことがあなたのその命——地上だけでなく、死んだ後の命についても——決定的に関係があるのだ、と言っています。これはとても厳粛なことだと思います。

[1] 永遠の生命を問う

ずっとルカによる福音書を読んでいます。先週の水曜日夜の祈禱会でもこの箇所を通して参加者で話し合ったのですが、ある人が、「ルカ福音書は、“**永遠の生命**”について、少し前の章から話が展開しているように思う。今日の箇所もそれと無関係ではないのではないか」とお話下さって、私も「本当にそうだ、今日の箇所できなりそのことが言われているのではなくて、もう前のところから確かにそれが問われているなあ」と思わせられました。

そして、それは良く考えて見ますと、このルカ福音書のある部分だけということではなく、“生命”の事柄、“永遠の生命”の事柄と言うのは、福音書全体、いえ、聖書全体にとっての最大のテーマだと言ってよいと思います。聖書は決して倫理道徳のことが第一に書かれているわけでも、社会的なメッセージが第一に語られているわけでもありません。私たちの“存在”について、“生命”について、そしてその“救い”について、神様ご自身からの語りかけとして聖書は語っているのです。これは、他のどんな書物とも全く次元を異にするものです。

その聖書の中で、この箇所はイエス・キリストご自身が、人間の死後についてのことを、「たとえ話」の形と言ってよいのでしょうか、お語りになったとても貴重な部分で、ルカ福音書だけが書いています。この物語は私たちに何を語っているのでしょうか？ あっさり読んだだけでは見落としがちなメッセージがここにはあるのではないかと思います。

[2] 金持ちも、貧しきラザロも死んだ

さて、この「**金持ちとラザロ**」の物語ですが、お読みになっていかがでしょうか？ 頭では理解しやすい話ではないでしょうか？ ひと言で言えば、死後の世界における「逆転」が語られています。25節でアブラハムは言っていますね。

「しかし、アブラハムは言った。『子よ、思い出してみるがよい。お前は生きている間に良いものをもらっていたが、ラザロは反対に悪いものをもらっていた。今は、ここで彼は慰められ、お前はもだえ苦しむのだ。』」

私たちも一般に思い描いている「死後の世界における帳尻合わせ」の構図です。

つまり、生前恵まれなかった人は死後の世界で報われる時が来る、その反面、豊かなで何不自由ない生活をした人は、むしろ死んでから苦しむと。納得しやすいではないですか。そして恐らくそのような考え方は、世の古今東西問わずあると思います。イエス様も、当時の人々のそのような考え方をういて、この話（特に前半部分）をされたのだと思います。

金持ちも、ラザロも、等しく死にました。お金のあるなしに拘わらず、死は等しくやってきます。地上の生活はそれでピリオドです。けれども、私たちの存在というのは、それで消えるものではないのだと、そのことはイエス様も否定されていません。いえ、それどころか、その後で、人間が永遠の生命に迎えられるか、或いはそうではないか、その間にある「断絶」——ここでは「**大きな淵**」という表現になっていますけれども——ということを語られていると思います。

ただ、その二人を分けているものは何なのか。金のあるなしだけなのか。確かにルカによる福音書では、イエス様は、同じ 16 章の 13 節で「あなたがたは、神と富とに仕えることは出来ない」と仰ったり、あとの 18 章でも、金持ちの議員と出会い、彼の多くの財産が、神様に従うことをさせない誘惑になってしまっているという現実を明らかにされていますから、**財産が、神様と私たち人間を結びつける弊害になり得る**、ということは語られていると思います。しかしそれは、お金持ちイコール神の国に入れない、ということではないと思うのです。教訓的な意味はあると思いますけれども。そしてまた一方、この貧しいラザロが何故天の祝宴に与ることが出来たのかも、理由は特に書かれていないのです。「信仰者であった」とも書かれていません。言ってみれば、このラザロは、一方的に神様の憐れみを頂いたのです。私自身は、ここであまり「金持ち」と「貧しい人」という対比の図式で考えすぎない方がよいのではないかと思います。そうすると、貧しい者に優しく接することこそが、神の国の扉を開くことなのだから、その心を失うなど“社会正義の話”だけになってしまいかねません。

それよりも私は、この話で強調されていることは、先ほども申しましたこの「**大きな淵**」の存在だと思います。死者の行く「陰府」と「御国」の間には、乗り越えられない「淵」が横たわっていると言うのです。

この金持ちは陰府の中から、はるか上の方にいるアブラハムに言うのですね。こんなにもここで苦しむのであれば、私の父の家に、死んだラザロを遣わして、五人の兄弟たちにこんな所に来ないように、悔い改めるように伝えて下さいと。これは或る意味、成程と思います。しかしアブラハムは、次のように語りました。29 節以下をお読みします。——『お前の兄弟たちにはモーセと預言者がいる。彼らに耳を傾けるがよい。』金持ちは言った。『いいえ、父アブラハムよ、もし、死んだ者の中からだれかが兄弟のところに行ってやれば、悔い改めるでしょう。』アブラハムは言った。『もし、モーセと預言者に耳を傾けないのなら、たとえ死者の中から生き返る者があっても、その言うことを聞き入れはしないだろう。』これで、この物語は閉じられているのです。

イエス様は、ここで、「モーセと預言者」に耳を傾けなければ、たとえ死者が甦っても、その者の言葉を真剣に聞きはしない、と言うのですね。これは、人の心を見抜いた鋭い言葉だと思います。「悔い改め」というのは、「あなた、悔い改めなさ

いよ」と誰かに言われてするものではないですよ。 「しぶしぶ」の悔い改めというのはあり得ないことです。悔い改めとは、まず自分自身に、御言葉が迫ってくるのです。神様に対する真実の「畏れ」が心に沸き起こってくるのです。人間ではなく、神様の言葉の前に立った時、神様に立ち返ろう、いや、立ち返りたい！立ち返らせて下さい、という祈りが心に起こってくること、それが悔い改めではないでしょうか？そして、それは神様のみ言葉の力、聖霊のお働きによるものです。

[3] 神はいのちのがわに立たれる

しかし、私たちは思うことがあるのではないのでしょうか？ 「御言葉」と言うけれども、その御言葉を聞かずに、知らずに死んでしまった人たちはどうになってしまうの？と。誰もが持つ問いではないのでしょうか？ だからこそ、生きている間に伝えることが必要であり、それを怠ってはいけないということ、それはその通りだと思います。けれども、ついに福音を受け入れることまで至らずに死んだ者はどうなるのでしょうか？私のつい一ヶ月前に事故で死んでしまった妹のことも思います。或いは、まだ福音を知らされていない多くの方がいますし、更に言えば、イエス様がお生まれになる前に生きていた人々はどうになってしまうのでしょうか？

しかし、私は、週報にもご紹介しましたがけれども、ウイリアム・ブレオーという人の「神はいのちのがわに立たれる」という詩を読んで、私は神様からの深い慰めと力を感じました。ここでブレオーが言っていることは、神様は人間の死（滅びと言っても良いと思います）を望まれる方ではないということです。このような詩です。

「わたしを憎むものは、死を愛する者である」（箴言 8:36）
なんと力強い文章だろう！
神について語られた とりわけキリストについて語られたこの言葉。
神は死者の中にはおられない
神は死を望まれない
死は神の意志によるのではない。
神は生命に味方される。
神は生命である。
あるいはヨハネの言うように、
神は愛である。
愛を憎む 神を憎む——二つは結局同じこと、
そして至る結果もまた同じ、死を愛するようになりはてるのだ。

これを読んで、私はこのような御言葉も思い起こしました。
「わたしはだれの死をも喜ばない。お前たちは立ち帰って、生きよ」と主なる神は言われる。」(エゼキエル 18:32)

「まことに、主はイスラエルの家にこう言われる。わたしを求めよ、そして生きよ。」(アモス書 5:4)

「死」というものは、神様が造られたものではないのです。それは、人間がサタンの誘惑に屈したその罪ゆえに「入り込んでしまった」ものなのです。神様がお造りになったのは、「死」ではなく、「命」です。神様と共に生きる存在として祝福し、「それは極めて良かった」(創世記 1:31)と言われる存在として、人間も造られているのです、もともと！そのような「極めて良い存在」を、どうして神様は喜んで滅ぼそうとするのでしょうか、と私は思います。旧約聖書・続編(外典)の中の「知恵の書」の中にもこのように記されています。——「神が死を造られたわけではなく、命あるものの滅びを喜ばれるわけでもない。生かすためにこそ神は万物をお造りになった。」

[4] イエス様の到来によって

しかし、イエス様はこのたとえで、死者を二分してしまうような、乗り越えられない「大きな淵」があると仰いました。けれども、このたとえで何故アブラハムを登場させているのでしょうか。何故、神様ご自身が出てこないのか。まあ、たとえ話として神様の役割をアブラハムに象徴させて語っておられるのかもしれませんが、私は、アブラハムの限界、ひいては旧約聖書の限界をもここで暗に言っているように思うのです。

何故そう思うかと言いますと、「モーセと預言者」という言葉が出てきますが、これは言い換えると、「律法と預言者」です。つまり、旧約聖書そのものです。それは、天地創造以来の神様の「啓示」、「メッセージ」です。それは素晴らしいもので、その価値が廃れることはありません。けれども、この「律法と預言者」は、**イエス様の到来によって、乗り越えられてしまっているのです！** 直前の 16 章 16 節をご覧ください。「律法と預言者はヨハネの時までである」と言い切っておられます。「それ以来、神の国の福音が告げ知らされ」と続いています。「それ以来」すなわち、**主イエス・キリストの到来によって、新しい契約の時代が始まっている**と言っているのです。

アブラハムはどこまでも人間です。アブラハムが出来ない事を、神の独り子であるイエス・キリストはして下さったのです。この深い淵、大きな淵に、**イエス・キリストは橋をかけて下さったのです。**それは、ペトロの手紙一 3 章に書いてあります。これは本当にすごい言葉です。私はこの言葉に初めて出会った時、心が震えました。3 章 18 節と 19 節をお読みします。

「キリストも、罪のためにただ一度苦しみました。正しい方が、正しくない者たちのために苦しまれたのです。あなたがたを神のもとへ導くためです。キリストは、肉では死に渡されましたが、霊では生きる者とされたのです。そして、霊においてキリストは、捕らわれていた霊たちのところへ行って宣教されました。」

伝統的な信仰告白文である「使徒信条」では、「主（キリスト）は、十字架につけられ、死にて葬られ、陰府に下り」と語ります。イエス様は死者のいる陰府にまで行かれて、宣教されているのです。ひとりも滅びる者がないように、です。救いの福音があらゆる時代、あらゆる場所の、あらゆる人間に届けられるということです。イエス様は、「深い淵」に、言わば横たわって、永遠の生命へとつなぐ架け橋となって下さったのです。あの十字架の上で、御腕を広げながら、私が道だ、この道を通って行きなさい、ここにあなたが歩むべき道がある、とおっしゃっているのではないのでしょうか。

[結] このレントの時期は、悔い改めの季節

もうすぐ今年度も終わりますが、教会の暦では、今イエス様のご復活前のレント、受難節に入っています。新鮮な思いで御言葉に真向かってゆきましょう。「ラザロ」とは、“神が助けてくださる”という意味だそうです。そうです、神様は私たちに救いの手を差し出して下さっています、憐れみをもって。イエス様が開いて下さった救いの道、永遠の命の道は、決して当たり前ではない、**神の子の尊い犠牲によって作られた架け橋**であることを改めて心に刻みつけましょう。私たちは、深い滅びの穴、深い深淵の中から、イエス様の愛のゆえに救って頂きました！**感謝と、悔い改めの時**として、受難節、そしてイースターに向かってゆきたいと思います。

お祈りをいたします。

神様、あなたの計り知れない御愛を感謝致します。滅びるしかない罪びとです。けれどもあなたは一方的な恵み、憐れみをもって、私たちを再びあなたの者として下さり、滅びどころか、死を超えた命、永遠の生命をお約束下さいました。その背後に、あなたの十字架と復活の出来事があったことを思い、心から感謝致します。

新しい年度をもうじき迎えます。どうぞ、心をあなたの聖霊によって新たにして下さいまして、ご一緒に福音を伝えていく働きの中に私たちを遣わして下さい。

午後に持たれます教会総会も、あなたご自身が共にいて、導いてください。

そして今この時、深い悲しみや、悩み、試練の中にいらっしゃる一人ひとりを特に目を注ぎ、力強い御手で導き、またお支え下さいますよう、お願い致します。

救い主イエス・キリストの御名によってお祈り致します。

アーメン。